りびんぐらいぶず　平成二十(二00八)年十二月第二号

浄土宗の人は愚者になりて往生す

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて、笑ませたまひしをみまゐらせ候ひき。

文応元年十一月十三日　善信八十八歳

乗信御房　（親鸞聖人御消息　注釈版聖典 P770)

一、 御手紙の時代

これは文応元年(一二六十年)、乗信房に送られた親鸞聖人のご消息（お手紙）であります。信心の行者は臨終の善悪にかかわらず浄土往生できると説かれます。現存する聖人の消息中、年月日の明記されている最後のものであります（末灯抄第六注釈版聖典 P771)）。

前年の正元元年（一二五九年）、お手紙の年の文応元年（一二六〇年）その翌年が御隠れになる前年の弘長元年（一二六一年）であります。毎年のように元号が変っていたことが知られます。毎年元号が改まるということは天変地異の相次いだことを意味しており、現に正元元年と文応元年は全国的な大飢饉と悪疫に見舞われ死者が甚だ多かったと伝えられます（Ref「ご消息」注釈版聖典 P771）。飢饉で食料もなく医療技術もないに等しい当時のことですから一旦飢饉に疫病が重なると人口も三分の一位に激減する程の出来事であったであろうと言われます。

そのような厳しい災害の中で人々が命を終えるときの有様はというとそれは凄まじいものであったと言われます。このことは親鸞聖人から浄土真宗のお法（みのり）を頂戴したお同行であっても変ることがなかったと推察されます。

臨終正念にして阿弥陀如来の来迎を確認できなければ、浄土往生おぼつかないというのが平安時代からの浄土教の常識でありましたから不安にかられたお同行のお尋ねを携えて乗信房が京に上って親鸞聖人に伺ったであろうと推察されます。

これに対して親鸞聖人は「生死無常のことわりは既にお釈迦如来が詳しくお説き遊ばして下さったことでもあるので、今更驚くことではない」と言い切られます。何という腹の据った凄い一言をさらりと言ってのける方でありましょうや。

それなら、親鸞聖人はこの人生で何に対して驚かれるというのであろうかと訝かられることであります。そのことはお手紙には書かれてはいませんが、聖人の常の教えに照らして推し量るというと「いつなんどき死ぬかもしれない私が一瞬一瞬の命を頂戴してただ今生かされている命の不思議に驚きをなしていらっしゃった」というのが生死無常の理（ことわり）を知った人の言葉ではなかったかと思われることであります。

思えば、私たちにとって今生に誕生するのも自らの意思を超えた節理によってきたのでありました。そのことに気づくのでさえ生まれたときではなくずっと後になってからであります。

同様に今生の命を終えるのも私たちの意思を超えた節理によるのであります。いや年間三万人の自殺者があることから見て自殺はできるという人があるかもしれませんが、それとて思い通りではなく、おそらくは自殺者に数倍する方々が果さずして後遺症に悩んでいらっしゃるに違いないと思われます。死ぬ時も自らの意思を働かすことができないというのが私

たちの偽らざる姿であります。

またどんなに健康で威勢のよい人であっても亡くなるときはだんだん衰えてきて多くは死の苦しみに苛まれれつつ逝くのですから臨終正念はとてもおぼつかないことであります。

そうすると浄土往生は叶わないことかということが問題になります。なぜなら平安時代以来の浄土教では臨終正念にして如来様の来迎に遇うことが浄土往生の確かな印だったからであります。観無量寿経の九品段にはそのことが書かれてあります。心静かに如来様のお心を感得するのでなければ浄土往生おぼつかないというのが第十九願の諸行往生（要門）、第二十願の自力念仏往生（真門）の常識だったからです。自分が生涯積んできた善根が果して浄土往生の為に有効であるか否かは臨終に際して弥陀三尊の来迎に叶うかどうかが決め手だったからです。

二、 浄土宗の人は愚者になりて往生す

けれども、阿弥陀如来から賜るお念仏一つでお救いに与る第十八願（弘願門）をお誓い下さった阿弥陀如来様はというと、たとえ私が臨終に如来様のことを忘れていようと、抱きとって決して捨てないと誓っていて下さることでありました。そのような如来様に恵まれたことをご開山は慶んでいらっしゃるのであります。思えば、ご開山聖人は、八十八歳の最晩年にあって尚、若かりし日に邂逅（かいこう）された法然聖人の御言葉を思い起こしておっしゃるのであります。

源空存在せしときに　金色の光明はなたしむ

禅定博陸（ぜんじょうはくりく）まのあたり　拝見せしめたまひけり

※註：禅定博陸とは、出家した九条兼実公を指します。

これは御身から金色の光明を放っていらっしゃる法然聖人を目の当たりにご覧になったというお話を九条兼実公からお聞きになってそれをそのまま真実だと受け止める程に親鸞聖人はお師匠の法然聖人にお仕えになっていらっしゃったことが知られる逸話であります(※)。

その法然聖人が「**浄土宗の人は愚者になりて往生す**」と仰せになったのです。愚者とはどれ位の愚者かといいますと白黒もはっきりしない程の愚者であると聖人はおっしゃっていらっしゃいます。

臨終の床の苦しみにあえば、一生涯積み重ねてきた知識も智恵も一瞬にしてすっ飛んでしまいます。僅かな発熱でさえ筋道立った思考を働かす事もできません。そんな臨終正念等全くおぼつかない凡夫をお救いの対象として下さったのが阿弥陀如来様でありました。

「聖道門の人は智恵を極めて往生する」のに対して「**浄土門の人は愚痴にかえりて往生する**」というのが法然聖人のお示しであります。

今生といつお別れするかを含めて臨終行儀もままならぬ私は、ただ阿弥陀如来の本願力にお任せすればよいのでありました。（Ref 平成二十年宗学院報恩講梯 實円和上ご法話より）。合掌。

（後書き）浄土教は厳しい自力の行の叶わぬ機類に対してただ信仏の因縁一つでお救いに与るみ教えであります。それには自らの罪業を懺悔することが前提になるというのが龍樹菩薩の示された易行道でした（※共にRef：瓜生津隆真先生平成二十一年一月二十一日愛糠会例会）。「まことにお恥ずかしいものであります」と愚者の自覚に帰ることがお救いの道であり臨終正念は案ずるに及ばないことでありました。合掌（玄宥記）

◆正覚寺仏教壮年会例会　毎月第一日曜午後八時より
◆正覚寺仏教婦人会例会　毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二０－０五０一大津市北小松四五二番地 ☎＆Fax ０七七－五九六－０一六六
ﾒｰﾙ mhkatata@pluto.dti.ne.jp　使務 堅田玄宥